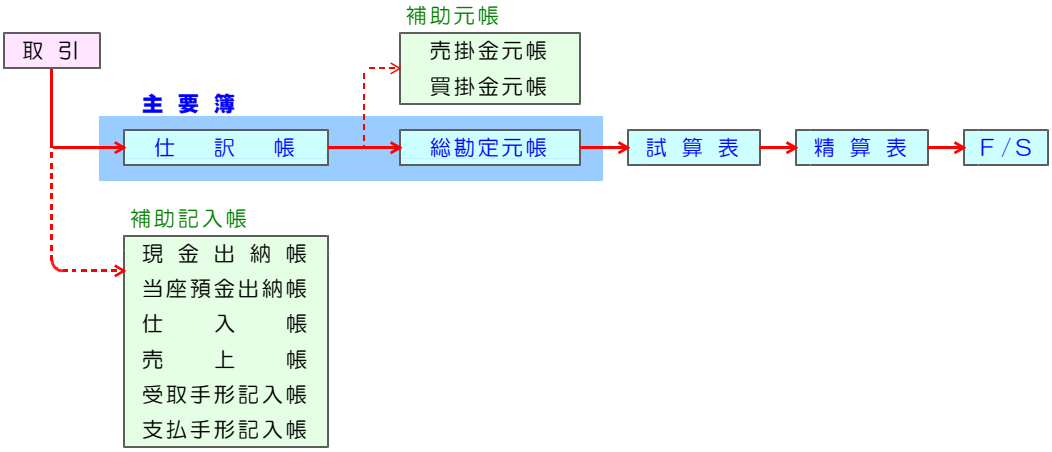
第５章　帳　簿　組　織

１．　単一仕訳帳制と複数仕訳帳制

３級では、全ての取引を「仕訳帳」に仕訳する「単一仕訳帳制」を学習しました。単一仕訳帳制のもとでは、日々の取引仕訳を１つずつ総勘定元帳へ転記する必要があるため、転記手続きが煩雑です。そこで、従来、補助記入帳としていた現金出納帳、当座預金出納帳、仕入帳、及び売上帳などにも「仕訳帳」の機能を持たせ、現金、当座預金、仕入及び売上などの主要な各勘定については、一定期間の合計額を転記するようになりました。従来、補助記入帳としていたものも仕訳帳として機能させる方法を「複数仕訳帳制」といいます。

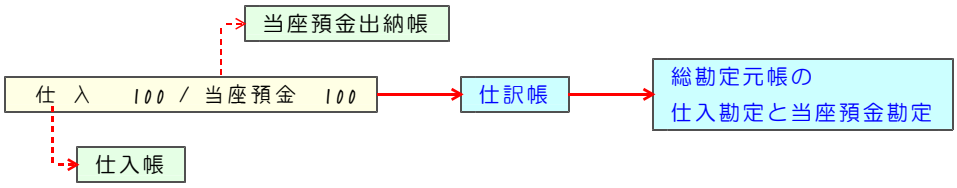
１－１　単一仕訳帳制

単一仕訳帳制のもとでは、全ての取引を単一の仕訳帳に記帳し、そこから、取引ごとに一つずつ総勘定元帳に転記します。そこでは、補助元帳や補助記入帳は補助的な役割しかありません。



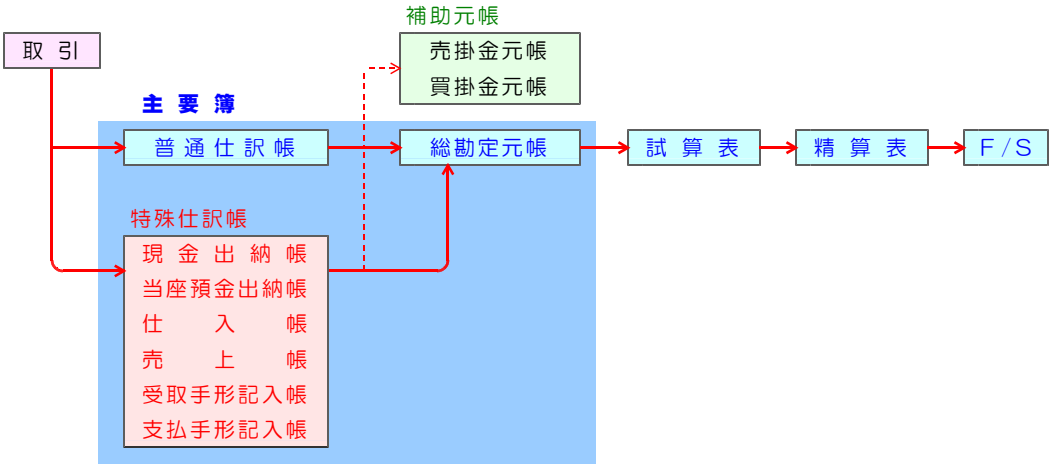
取引仕訳 ～ 勘定記入までの流れ（単一仕訳帳制）

商品を仕入れて、小切手を振り出して支払った場合、その取引仕訳は、「仕訳帳」に記帳し、「仕訳帳」から総勘定元帳の「仕入勘定」や「当座預金勘定」へ転記します。企業によっては、「仕入帳」や「当座預金出納帳」にも記帳を行いますが、これは補助的な記録を行っているに過ぎません。



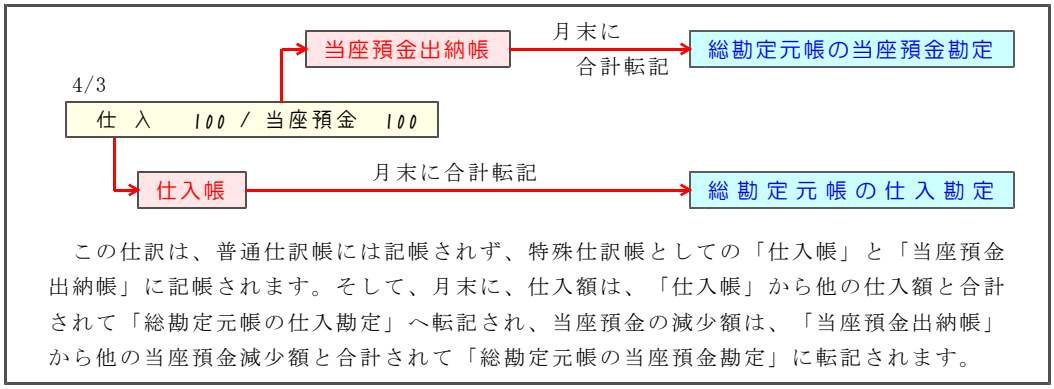
１－２　複数仕訳帳制

複数仕訳帳制では、当座預金出納帳や仕入帳など、従来は補助記入帳としていたものに、仕訳帳としての機能を持たせ、これを「特殊仕訳帳」とよびます。従って、特殊仕訳帳の親勘定（たとえば、現金出納帳の現金勘定）に関わる取引を行った場合、原則として、普通仕訳帳には仕訳を行わず、特殊仕訳帳に記帳します。逆に、特殊仕訳帳の親勘定に関わる取引以外は、すべて普通仕訳帳に記帳します。



普通仕訳帳からは、総勘定元帳に一つずつ転記（個別転記）しますが、特殊仕訳帳の親勘定や特設欄が設けられている勘定（たとえば、売上帳の売掛金勘定）は、一定期間の合計額をまとめて総勘定元帳に転記（合計転記）します。ただし、全ての取引を合計転記するわけではなく、特殊仕訳帳の諸口欄に記入されている金額は、原則として、総勘定元帳に個別転記します。

取引仕訳 ～ 勘定記入までの流れ（当座預金出納帳と仕入帳を特殊仕訳帳としているケース）



この仕訳は、普通仕訳帳には記帳されず、特殊仕訳帳としての「仕入帳」と「当座預金出納帳」に記帳されます。そして、月末に、仕入額は、「仕入帳」から他の仕入額と合計されて「総勘定元帳の仕入勘定」へ転記され、当座預金の減少額は、「当座預金出納帳」から他の当座預金減少額と合計されて「総勘定元帳の当座預金勘定」に転記されます。

当座預金出納帳

日付		勘定科目	元丁	売掛金	諸口	日付		勘定科目	元丁	買掛金	諸口
						4	3	仕入	✓		100

仕入帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸口
4	3	当座預金	A商店　a商品 @100×1個	✓		100

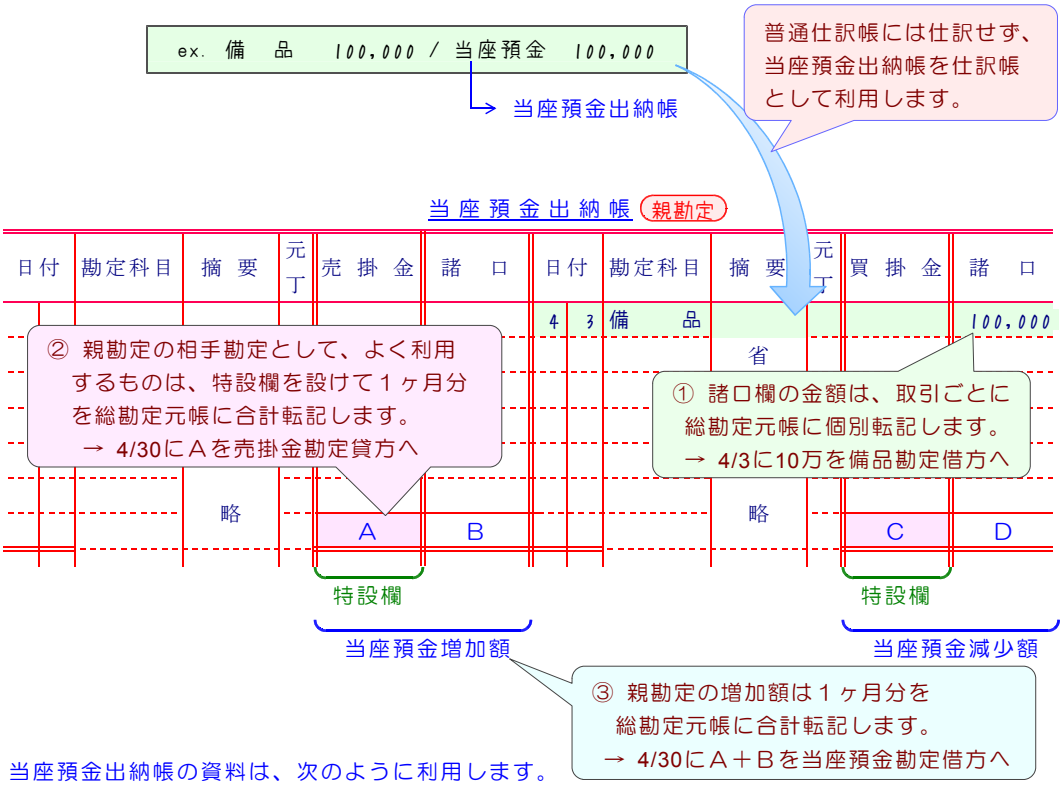
２．　特殊仕訳帳

複数仕訳帳制のもとでは、単一仕訳帳制において補助記入帳とされていた現金出納帳や当座預金出納帳、仕入帳などを特殊仕訳帳とします。そして、たとえば、当座預金出納帳における「当座預金勘定」を「親勘定」といい、「親勘定」に関係する仕訳については、普通仕訳帳に行うのではなく、特殊仕訳帳に仕訳を直接記帳していきます。

２－１　当座預金出納帳のみを特殊仕訳帳としていた場合

ここでは、当座預金出納帳を特殊仕訳帳としている場合、次のような仕訳をどのように記帳するのか、あるいは、特殊仕訳帳の特設欄の機能や親勘定の合計転記について学習します。

（取引）　4/3に備品を購入し、代金 100,000円は小切手を振り出して支払った。



当座預金出納帳の資料は、次のように利用します。

① 諸口欄の金額を取引ごとに総勘定元帳に個別転記する。

備　品

② 特設欄を設けた勘定の１ヶ月分の金額を総勘定元帳に合計転記する。

売掛金　　買掛金

③ 親勘定の増減額の１ヶ月分を総勘定元帳に合計転記する。

当座預金

設例１　当座預金出納帳のみを特殊仕訳帳としている場合

ＦＩＮ株式会社は当座預金出納帳を特殊仕訳帳として用いている。次の取引を普通仕訳帳及び当座預金出納帳に記帳するとともに、総勘定元帳への転記を行いなさい。

1. ４/３に備品を購入し、代金 100,000円は小切手を振り出して支払った。
2. ４/８に商品を仕入れ、代金 100,000円は小切手を振り出して支払った。
3. ４/15に商品を販売し、代金 245,000円は掛けとした。
4. ４/18に商品を仕入れ、代金 150,000円は掛けとした。
5. ４/23に買掛金 40,000円を小切手を振り出して支払った。
6. ４/25に売掛金 180,000円を回収し、当座預金口座に入金された。
7. ４/28に買掛金 20,000円を小切手を振り出して支払った。

① 諸口欄の金額は、取引ごとに総勘定元帳に個別転記します。
→ 4/3に10万を備品勘定借方へ
→ 4/8に10万を仕入勘定借方へ

親勘定

当座預金出納帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	売掛金	諸口	日付		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸口
	〃		当座預金	2		180,000							
	〃		前月繰越			120,000		〃		次月繰越			40,000
						300,000							300,000

② 特設欄の金額は、１ヶ月分をまとめて 総勘定元帳に合計転記
→ 4/30に18万を売掛金勘定貸方へ

③ 親勘定の増減額は１ヶ月分をまとめて総勘定元帳に合計転記
→ 4/30に26万円を当座預金勘定貸方へ

④ 特殊仕訳帳の親勘定が関連しない取引は普通仕訳帳に仕訳して、取引ごとに個別転記

普通仕訳帳

日付		摘要	元丁	借方	貸方
4	15	（売掛金）	4	245,000	
		（売上）	31		245,000
4	18	（仕入）	21	150,000	
		（買掛金）	10		150,000

総勘定元帳

当座預金　2

4/30	180,000	4/30	260,000

備品　5

4/3	100,000		

売掛金　4

4/15	245,000	4/30	180,000

買掛金　10

4/30	60,000	4/18	150,000

仕入　21

4/8	100,000		
4/18	150,000		

売上　31

		4/15	245,000

２－２　二重仕訳 ～ 当座預金出納帳と仕入帳を特殊仕訳帳としていた場合

特殊仕訳帳を利用すれば、親勘定や特設欄の金額は月末に１ヶ月分をまとめて総勘定元帳に転記すれば済むため、記帳事務が著しく簡略化されます。その一方で、取引によっては複数の特殊仕訳帳に記帳されるため、総勘定元帳への転記が二重に行われる危険があります。

ここでは、当座預金出納帳と仕入帳を特殊仕訳帳としている場合に生ずる二重仕訳について学習します。

(1) 二重仕訳 ① ～ 特殊仕訳帳の諸口欄の具体的な相手勘定が他の親勘定の場合

（取引）　４／８に商品を仕入れ、代金 100,000円は小切手を振り出して支払った。

（借方）　仕　入	100,000	（貸方）　当座預金	100,000

仕　入　帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸　口
4	8	当座預金		2		100,000

当座預金出納帳　（貸方）

日付		勘定科目	元丁	買掛金	諸　口
4	8	仕　入	21		100,000

① 諸口欄の金額を取引ごとに総勘定元帳に個別転記する。

仕　入　21

4/ 8	100,000	ダメ！

当座預金　2

ダメ！	4/ 8	100,000

（月末）

仕　入　帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸　口
4	8	当座預金		2		100,000
4	30		総仕入			250,000

当座預金出納帳　（貸方）

日付		勘定科目	元丁	買掛金	諸　口
4	8	仕　入	21		100,000
4	30	当座預金			260,000

③ 親勘定の増減額は１ヶ月分をまとめて総勘定元帳に合計転記

仕　入　21

4/ 8	100,000	35万 ×
4/30	250,000	25万○

当座預金　2

26万○	4/ 8	100,000
36万 ×	4/30	260,000

１ヶ月間の仕入額25万円や当座預金減少額26万円には、4/8の10万円が含まれているため、このままでは、10万円が二重に勘定記入されてしまっています。二重仕訳の問題を回避するためには、4/8の10万円は「諸口欄」であっても、個別転記しないようにする必要があります。

⑤ 諸口欄の金額でも、相手勘定が他の親勘定の場合は、例外的に、個別転記を行わない。このため、元帳欄に✓をつける。

（月末）

仕　入　帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸　口
4	8	当座預金		✓		100,000
4	30		総仕入			250,000

当座預金出納帳　（貸方）

日付		勘定科目	元丁	買掛金	諸　口
4	8	仕　入	✓		100,000
4	30	当座預金			260,000

(2) 二重仕訳 ② ～ 特殊仕訳帳の特設欄に他の親勘定を設けている場合

親勘定の相手勘定としてよく利用するものは、特設欄を設けて、１ヶ月分の金額をまとめて総勘定元帳に転記するのが原則でした。しかし、特設欄に他の特殊仕訳帳の親勘定（たとえば、仕入帳の特設欄に設けられている「当座預金」）については、親勘定として合計転記されるため、特設欄から合計転記する必要はありません。

仕　入　帳

日付		勘定科目	摘　要	元丁	当座預金	諸　口
4	8	当座預金		✓	100,000	
					100,000	
4	30		総仕入			250,000

当座預金出納帳　（貸方）

日付		勘定科目	元丁	仕　入	諸　口
4	8	仕　入	✓	100,000	
				100,000	
4	30	当座預金			260,000

⑥ 特設欄の金額でも、相手勘定が他の親勘定の場合は、例外的に、個別転記を行わない。このため、元帳欄に✓をつける。

(3) 二重仕訳 ③ ～ 普通仕訳帳と特殊仕訳帳に記帳される取引

次の仕訳は、普通仕訳帳と当座預金出納帳に記帳されます。この場合も、２つの仕訳帳から総勘定元帳に転記すると二重仕訳となるため、普通仕訳帳からは「受取手形勘定」と「手形売却損勘定」にだけ転記を行い、当座預金の増加は当座預金出納帳からの合計転記に任せることになります。

（借方）　当座預金	9,000	（貸方）　受取手形	10,000
手形売却損	1,000		

（借方）　当座預金出納帳

日付		勘定科目	元丁	売掛金	諸　口
5	3	受取手形	✓		9,000
5	31	当座預金			300,000

普　通　仕　訳　帳

日付		摘　　要	元丁	借　方	貸　方
5	3	諸　口　（受取手形）	3		10,000
		（当座預金）		9,000	
		（手形売却損）	29	1,000	

⑦ 普通仕訳帳に記帳される仕訳であっても、特殊仕訳帳の親勘定や特設欄の勘定は、個別転記しない。

総　勘　定　元　帳

当座預金　2

5/31　300,000	

受取手形　3

	5/3　10,000

手形売却損　29

5/3　1,000	

２－３　受取手形記入帳

受取手形記入帳や支払手形記入帳を補助記入帳として利用している場合の記帳については、３級で学習しました。ここでは、特殊仕訳帳として利用している場合について学習します。最大の留意点は、受取手形や支払手形のマイナスは、顛末欄にメモ書きするだけで、仕訳は普通仕訳帳で行う点です。

設例２　当座預金出納帳、売上帳、仕入帳、受取手形記入帳、及び支払手形記入帳を特殊仕訳帳としている場合

1. ７／３に商品を販売し、代金 245,000円は約束手形を受け取った。
2. ７/10に売掛金の回収として、180,000円の約束手形を受け取った。
3. ７/23に買掛金 180,000円を決済するため、7/10に受け取った手形を裏書譲渡した。

諸口欄の金額でも、相手勘定が他の親勘定の場合は、例外的に、個別転記を行わない。このため、元帳欄に✓をつける。

受取手形記入帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	売掛金	諸口		顛末
7	3	売上		✓		245,000		
7	10	売掛金		✓	180,000			7/23に買掛金決済のために裏書譲渡
7	31		売掛金	4	180,000→	180,000		
	〃		受取手形	3		425,000		

特設欄の金額は、１ヶ月分をまとめて 総勘定元帳に合計転記

親勘定の増減額は１ヶ月分をまとめて総勘定元帳に合計転記

受取手形のマイナスは、メモだけ。マイナス仕訳は普通仕訳帳で行う。

普通仕訳帳

日付		摘要	元丁	借方	貸方
7	23	（買掛金）	10	180,000	
		（受取手形）	3		180,000

２－４　売掛金（得意先）元帳と買掛金（仕入先）元帳

売掛金勘定や買掛金勘定の内訳帳として、得意先元帳や仕入先元帳が作成されます。記帳については、３級で学習済みのため、ここでは、当座預金出納帳の元丁欄の記入について学習します。

当座預金出納帳

日付		勘定科目	摘要	元丁	売掛金	諸口	日付		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸口
9	15	売掛金	A商店	✓/得1	180,000		9	7	買掛金	X商店	✓/仕1	120,000	
	22	未収金		6		40,000		10	買掛金	Y商店	✓/仕2	130,000	
	30		売掛金	4	180,000→	180,000		30		買掛金	10	250,000→	250,000
	〃		当座預金	2		220,000		〃	当座預金		2		250,000

9/15の時点では売掛金勘定への転記は行っていないが、得意先元帳であるＡ商店勘定（得１）には、売掛金回収の記帳を行ったことを意味している。

３．　伝票会計

ここでは伝票会計を学習しますが、記入した伝票から「仕訳日計表」を作成する点以外は、３級で学習した内容と同じです。ただし、２級の本試験では、第２問（20分問題）としてよく出題されるので、しっかりと復習しておきましょう。

３－１　３伝票制

伝票会計では、伝票を仕訳帳として機能させます。３伝票制では、現金の入金をともなう取引を「入金伝票」へ、現金の出金をともなう取引を「出金伝票」へ、現金の入出金をともなわない取引を「振替伝票」に記入し、伝票をもとに「仕訳日計表」を作成した上で、総勘定元帳の各勘定に転記します。

(1) ３級の復習

①　商品を販売し、代金 60,000円は現金で受け取った。

（借）現　金	60,000	（貸）売　上	60,000	→ 入金伝票へ記入

入金伝票

（　　）　　円

②　商品を販売し、代金 60,000円は掛けとした。

（借）売掛金	60,000	（貸）売　上	60,000	→ 振替伝票へ記入

振替伝票

借（　　）　　円　貸（　　）　　円

③　商品を販売し、代金 60,000円のうち 20,000円は現金で受け取り、残額は掛けとした。

一部振替取引については、取引を分解する方法

（借）現　金	20,000	（貸）売　上	20,000	→ 入金伝票へ記入
（借）売掛金	40,000	（貸）売　上	40,000	→ 振替伝票へ記入

入金伝票

（　　）　　円

振替伝票

借（　　）　　円　貸（　　）　　円

いったん全て掛け取引として取り扱う方法

（借）売掛金	60,000	（貸）売　上	60,000	→ 振替伝票へ記入
（借）現　金	20,000	（貸）売掛金	20,000	→ 入金伝票へ記入

入金伝票

（売掛金）　20,000　円

振替伝票

借（売掛金）　60,000　円　貸（売　上）　60,000　円

(2) 仕訳日計表の作成

日々の取引を伝票記入し、伝票から仕訳日計表、仕訳日計表から総勘定元帳の各勘定口座の記帳を行います。２級の本試験では、ある１日の伝票を資料に与え、伝票からその日の取引を想像させて、仕訳日計表と総勘定元帳を作成させる問題パターンが繰り返し出題されています。

ここでは、取引 → 伝票 → 仕訳日計表 → 総勘定元帳という一連の流れをみていきます。

１．ある一日の取引（一部振替取引については、取引を分解して起票している）

① 商品を仕入れ、代金 20,000円のうち、15,000円は現金で支払い、残額は掛けとした。

（借）仕　入	15,000	（貸）現　金	15,000	→ 出金伝票へ記入
（借）仕　入	5,000	（貸）買掛金	5,000	→ 振替伝票へ記入

② 商品を販売し、代金 60,000円のうち、20,000円は現金で受取り、残額は掛けとした。

（借）現　金	20,000	（貸）売　上	20,000	→ 入金伝票へ記入
（借）売掛金	40,000	（貸）売　上	40,000	→ 振替伝票へ記入

③ 消耗品 5,000円を購入し、代金は現金で支払った。

（借）消耗品費	5,000	（貸）現　金	5,000	→ 出金伝票へ記入

④ 売掛金 32,000円について約束手形の裏書譲渡を受けた。

（借）受取手形	32,000	（貸）売掛金	32,000	→ 振替伝票へ記入

⑤ 売掛金 8,000円を現金で回収した。

（借）現　金	8,000	（貸）売掛金	8,000	→ 入金伝票へ記入

２．仕訳を伝票に記入

入金伝票　No. 101
売　上　20,000

入金伝票　No. 102
売掛金　8,000

出金伝票　No. 201
仕　入　15,000

出金伝票　No. 202
消耗品費　5,000

振替伝票　No. 301
仕　入　5,000
買掛金　5,000

振替伝票　No. 302
売掛金　40,000
売　上　40,000

振替伝票　No. 303
受取手形　32,000
売掛金　32,000

３．仕訳日計表の作成

仕　訳　日　計　表　　701

借	勘定科目	貸方
	現　金	
	受取手形	
	売掛金	
	買掛金	
	売　上	
	仕　入	
	消耗品費	
125,000		125,000

４．総勘定元帳の各勘定へ記帳（一部）

現　金

		摘　要	仕丁	借方	貸方	借/貸	残高
7	1	前月繰越	✓	123,000		借	123,000
	〃	仕訳日計表	701			〃	
	〃	仕訳日計表	〃			〃	

仕訳日計表から１日の現金増加額合計と現金減少額合計をまとめて、転記する。

３－２　５伝票制

５伝票制では、「仕入伝票」と「売上伝票」も用いることになります。５伝票制では、一部振替取引について、いったん全て掛け取引で行われたと仮定して伝票への記帳を行います。

１．ある一日の取引

①　Ｙ商店から 20,000円の商品を仕入れ、15,000円は現金で支払い、残額は掛けとした。

（借）仕　入	20,000	（貸）買掛金	20,000	→ 仕入伝票へ記入
（借）買掛金	15,000	（貸）現　金	15,000	→ 出金伝票へ記入

②　Ａ商店へ 60,000円の商品を販売し、20,000円は現金で受取り、残額は掛けとした。

（借）		（貸）		→ 売上伝票へ記入
（借）		（貸）		→ 入金伝票へ記入

③　消耗品 5,000円を購入し、代金は現金で支払った。

（借）消耗品費	5,000	（貸）現　金	5,000	→ 出金伝票へ記入

④　Ｂ商店に対する売掛金 32,000円について約束手形の裏書譲渡を受けた。

（借）受取手形	32,000	（貸）売掛金	32,000	→ 振替伝票へ記入

⑤　Ａ商店に対する売掛金 8,000円を現金で回収した。

（借）現　金	8,000	（貸）売掛金	8,000	→ 入金伝票へ記入

２．仕訳を伝票に記入

入金伝票　No. 101
売掛金（Ａ商店）　20,000

入金伝票　No. 102
売掛金（Ａ商店）　8,000

仕入伝票　No401
買掛金（Ｙ商店）　20,000

出金伝票　No. 201
買掛金（Ｙ商店）　15,000

出金伝票　No. 202
消耗品費　5,000

売上伝票　No. 501
売掛金（Ａ商店）　60,000

振替伝票　No. 301
受取手形　32,000
売掛金（Ｂ商店）　32,000

３．仕訳日計表の作成

仕　訳　日　計　表　　701

借方	勘定科目	貸方
28,000	現　金	20,000
32,000	受取手形	
	売掛金	
	買掛金	
	売　上	60,000
20,000	仕　入	
5,000	消耗品費	
160,000		160,000

４．総勘定元帳の各勘定へ記帳（一部）

現　金

		摘要	仕丁	借方	貸方	貸借	残高
7	1	前月繰越	✓	123,000		借	123,000
	〃	仕訳日計表	701	28,000		〃	151,000
	〃	仕訳日計表	〃		20,000	〃	131,000

５．得意先元帳（一部）

Ａ　商　店

		摘要	仕丁	借方	貸方	貸借	残高
7	1	前月繰越	✓	30,000		借	30,000
	〃	売上伝票	501	60,000		〃	90,000
	〃	入金伝票	101		20,000	〃	70,000
	〃	入金伝票	102		8,000	〃	62,000